

ビッグデータ時代の到来が騒がれて早10年。GoogleやFacebookが世界的覇者となった最大の理由は、膨大なデータを入手できるプラットフォームをいち早く構築したからだ。「データを制すものはビジネスを制す」というデータマーケティングの常識は定着し、ここ数年の急速なAIの技術発展もデータ量の爆発的な増加と相関関係にある。ブロックチェーンのような永久にデータを記録し続けられる分散型台帳技術も登場し、世界で最も電子化の進むエストニアなどではすでにブロックチェーン技術を取り入れた画期的な電子行政サービス「e-Residency」を2015年に始動した。その一方で、個人データの流出に伴うプライバシー問題やデータビジネスの偏りに警鐘を鳴らし続けてきたEUは、2018年5月ついに念願の個人データを保護する新法「一般データ保護規則 (GDPR)」を施行している。

データをめぐる様々な攻防戦が巻き起こる現在、「データからしか描き出せない」新たなランドスケープを生み出すアーティストもいる。日本を代表する電子音楽家の池田亮司は、1984年から映像・音響・パフォーマンスの融合で舞台空間を革新させたアート集団ダムタイプの一員として活動した後、空間を構築しうる要素を「データ」に見出した。《test pattern<sup>o</sup>》や《datamatics》など、本来は目に見えない無限のデータをサウンドと光学装置を用いて極限まで引きずり出し、圧倒的な身体体験へと昇華させている。日本のメディアアート界をリードする真鍋大度もまた、データを駆使して表現をアップデートしてきた人物だ。2015年に発表した《chains》はビットコインの取引データを3D空間上で可視化することで、驚異的なスピードで取引が進む、見えざる経済シーンを浮かび上がらせた。またクリエイティブコーダーとして、数々のアート作品やプログラミング・ツールの開発に携わってきたカイル・マクドナルドは、鏡張りのインスタレーション《Social Soul》でSNS上に日々流れるデータが無限に続いていくような世界を構築している。一方、データを用いて社会の潜在的な問題を浮上させるバオロ・キリオは、《Obscurity》にてオンライン公開されているアメリカ人逮捕者1500万人の顔写真データを集めて合成し、データ内容を曖昧にすることで、現代の情報倫理を問いかけている。

ビッグデータの時代といえど、この有象無象の世界で「データ」として記録されるものはほんの一部にすぎず、データにとらわれてモノゴトの本質を見失うという議論もある。だが、個人の生や社会のあらゆる事象がデータ化される時代だからこそ、こうしてデータを武器に新たな地平を見出し、社会に風穴を開けるのがアートサイエンスの役目といえるだろう。

DATA, CODE



池田亮司《test pattern [n° 6]》20

0と1の世界から、知覚の極限に挑戦する  
いかなるデータも「0/1」のバイナリーとバーコードに変換しうるシステムの応用を通じて、装置の人間の知覚の極限に挑んだインスタレーション。8台のモニターと16台のスピーカーが暗い空間で一直線上に配置され、高周波のシグナルに同期しながら暗闇の中で鮮烈に明滅する。16チャンネルのサウンドは、モノトーンのラインからなる整然としたパターン映像へと即時に変換されていく。瞬間的に、毎秒数百フレームを超えるほど高速に変化し続けることで、装置の性能ギリギリまで駆動すると同時に、体験者の知覚を極限まで拡張していく。意外なことに、このモノクロームのデジタル空間の中で人々は思い思いに身を休め、瞑想をしたりヨガをしたりする人も現れるほど、不思議な心地よさを生み出していた。2015年には、NYのタイムズスクエアのアートプロジェクトでも展開され、深夜の5分間だけ全ビルボードを作品でジャックしたことも。

# データから見える 新たな風景とは?



## 真鍋大度《chains》2014

### 現代の金融システムを可視化する

ブロックチェーンの仕組みを音と映像で表現し、現代の金融やトレーディングシステムに対して問題提起を行ったインスタレーション。「BlockChain.info」と8箇所のビットコイン取引所のAPIからリアルタイムに情報を取得し、刻一刻と変わる取引の状況をビジュアライズし、商取引が発生すると徐々に音が盛り上がり、およそ10分に一度のブロック生成のタイミングで盛り上がりのピークを見せる。また、独自の自動取引アルゴリズムによって、オンラインでベットされた賭け金を運用し期間内の成績に応じてペイバックする仕組みも開発した。

## DATA, CODE



## カイル・マクドナルド《Social Soul》2014

### 無限のSNSワールドに誘う

『誰かのSNSのストリームの中に紛れ込んだら何が見えるだろうか?』という問いから生まれたインスタレーション。モニターと鏡で構成された室内には、入場者自身のTwitterのソーシャルタイムラインから抽出された画像や動画をミックスしたビジュアルが表示され、サウンドもリアルタイムに生成されていく。本作品は「TED2014」のスポンサーであるデルタ航空のために制作され、入場者はTwitterの情報に基づいて、TEDへの参加している「Soul Mate」とオフラインで出会うよう、会場を出るとその両者にツイートが飛び仕組みになっている。作品のソースコードはすべてGithub上で公開されている。



## DATA, CODE



## パオロ・キリオ《Obscurity》2016

### ウェブ公開された「顔写真」の倫理を問う

アメリカでは、逮捕した人物の顔写真が原則すべてウェブサイトで公開される。そのネット公開された1500万もの逮捕者の顔写真データをランダムにシャッフルして合成し、ぼかしをかけて提示した作品。オンライン参加型の社会実験プロジェクトを好むキリオは、この合成写真をウェブで発表するとともに、すでに存在する「犯罪者の顔写真サイト」を残すべきか、それとも削除すべきかを人々に問いかけた。日々、ネット空間にはありとあらゆる顔写真が公開されているが、それが一度「犯罪者」となった瞬間、その人の将来は一変する。インターネット時代の情報倫理を鋭く問う作品。